イエス・キリスト、映(ば)えない生涯

『ブイチューバー：バーチャルチューバーの略。アニメなど仮想のキャラクター（アバター）に扮してネットで動画配信などを行うユーチューバーのこと。』

先日、とある番組で、「Vチューバーがアバター（架空のキャラクター）を作成すること」を指す造語として『受肉(じゅにく)』というワードが使われていることを知り、私は思わず吹き出した。受肉と言えば「神が人間の姿（キリスト）となって生まれたこと」を指すガチガチのキリスト教用語だ。ふむ。誰が言い出したか知らないが、センスを感じる。確かにイエス・キリストは神がデザインした分身、自分自身を投影したアバターと言えるかもしれない。

イエス・キリストはバーチャルではなく現実世界に生まれた歴史上の人物だ。さて、この人間となった神は、どこに、どんな姿で生まれたのだろう。

何といっても神様だ、ブラッド・ピットのようなイケメンで、スポーツ万能、シリコンバレーでＩＴ企業を営む大富豪の家庭というハイスペックなステータスで生まれることも出来た。（…私なら迷わずそうする）

ところが、実際のキリストはセレブなブラピではなかったらしい。聖書にキリストの容姿について詳しい記述はないが、（イケメンならイケメンと書いてあることが多い）超美男子であった可能性は低く、人並み、もしくは残念な容姿だった可能だって十分ある。イスラエルのド田舎、大工の家庭に生まれたところを見ても、決して裕福ではない。つまりは、『どこにでもいる普通の人』というのが、神が地上に現れた時の姿だ。また意外にも、キリストが公の場で活躍した期間は非常に短い。弟子を集め、奇跡と教えによって民衆を魅了し、宣教活動にあたった期間は 30～34 歳ごろのたった三年半であり、その後「自分を神と称した」という理由で十字架刑にされている。こ

の三年半を除くと、人生の大半は、取り立てて目立つエピソードのない平凡な人生、今風にいうと、インスタにあげることもない、なんとも映（ば）えない人生だった。

実は、『どんな姿にでもなれた神』がわざわざ映えない生涯を選ばれたのには目的があった。それは私たちと同じ目線を持ち、私たちと親しくなることを望まれたからだ。聖書はこう述べる。

“キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。”（ピリピ人への手紙二章六-八節）

子供の話を真剣に聞きたいと思う大人は、膝を折り、身を低くかがめる。子供と目線を合わせるるためだ。そのように『神がお高くとまらず、お低くなられた姿』がイエス・キリストなのだ。キリストはこけては膝をすりむき、動き回れば疲れては腹を空かせるような『普通の人』だった。こんな人間くさい神を、私は他に知らない。イエスは私たちと同じ歩みをされたからこそ、私たちの苦しみがわかる。そして、私たちもこの方に、弱さをありのままにさらけ出せるのだ。

さて、そんな映えない生涯を歩んだキリストは十字架にかけられた三日目に復活し、今や世界一の有名人だ。二千年前に神が『受肉』した日は、クリスマスとして今も祝われ続けている。

飾らず、気取らず、見栄えもない普通の姿をとられたからこそ、イエス・キリストは世界中の人から愛され続けているのかもしれない。（文：いおり）

“彼は主の前に、ひこばえのように生え出た。彼には見るべき姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない。”（イザヤ書五三章二節）